

## 第 14 回高等学校改革プラン推進委員会（第三推進委員会）議事録

1 日時 平成 1 年 1 月 12 日（木）午前 9 時 00 分～午後 0 時 00 分

2 場所 南箕輪村民センター 2 階 大会議室

3 出席委員

池上 昭雄委員長	川島 一慶委員
笠原 伸二副委員長	丸茂 貴子委員
小坂 樫男委員	小池 博委員
岡庭 一雄委員	関 哲夫委員
小林 辰興委員	北原 秀樹委員
小口 武男委員	藤本 功委員
北原 曜委員	

4 開会

（野村主幹教育支援主事）

おはようございます。本日は年始めの誠にお忙しい中、お時間を割いていただきまして、ご参集いただきましてありがとうございます。では、会を始めたいと思います。委員長さんよろしく願いいたします。

（池上委員長）

おはようございます。

明けましておめでとうございます。旧年中は大変お世話になりました。今年もよろしくどうぞお願いいたします。大変お寒いところを、早朝からお越しいただきましてありがとうございます。ただいまより第 14 回の会議を開催いたします。よろしくお願いいたします。

それでは、恒例によりまして事務局より説明をいただきたいと思います、よろしくお願いいたします。

5 資料説明

（野村主幹教育支援主事）

それではお願いいたします。資料説明の前ですが、他の推進委員会の様子についてお伝えしたいと思います、第一通学区は 1 月 7 日にございました。多部制・単位制高校を魅力ある学校として、配置することが再確認され、現在候補とされている坂城高校と屋代南高校以外には、具体的な配置が考えられないため、どちらがふさわしいのか次回継続して審議し、推進委員会としての方向性を出すことといたしました。また長野南高校と松代高校の統合につきましては、通学区全体の少子化や区間移動の現実を考慮して、統合を前提として実施時期の検討を、要するという意見が多くありました。統合の場合、前回提案された長野南高校の、校地、校舎の活用に賛同する意見と、松代高校の地域連携や歴史を尊重するという意見がございました。

続いて第 2 通学区でございます、昨年末 12 月 28 日に、行われたところからお話いたしますが、9 時から 11 時半までは非公開で審議を行い、11 時半から公開としその時点で、

委員長から審議の概要について、説明を行いました。第2通学区の再編について審議を行い、生徒数が減少している状況等から望月高校、蓼科高校を統合して、よりよい学校をつくっていくことで合意されました。多部制・単位制の配置につきましては、校名を挙げて議論を行ったが結論に至らず、次回引き続き議論を深めていくこととしました。

今年に入りまして、9日午後に第2通学区で推進委員会がございました。多部制・単位制高校の配置について、引き続き議論を行いました。生徒数の減少にから、佐久市南部で再編が必要であることなどを考慮して、候補案の野沢南高校を転換することに、賛成意見が多く出されたが、他の学校との統合も合わせて考えたかどうかという意見や、反対意見も出されました。また他の候補と考えられる校名も挙げられました。その中で出席した委員の中で投票を行った結果、候補案の野沢南高校を、転換していくことで、合意いたしました。

第4通学区でございますが、1月9日に行われました。委員長作成の県教委への報告書の、原案について審議を行いました。次回も引き続き審議の予定でございます。

それから1月10日午後でございますが、諏訪地区高校改革プランの、意見交換会がございました。10日の午後2時から4時50分までと、20分予定を超えてヘルシースパ岡谷で意見交換をいたしました。岡谷南同窓会と岡谷東同窓会の共催であります。地域の声を聞くことについて、各推進委員に気持ちを求められました。各推進委員さんは、広く声を聞きたいと、お答えになっておられました。流入を含め中学校卒業の生徒数は変わらないとの声もいただいたが、藤本推進委員さんからは数字を挙げて説明をいただきました。短期間で集められた両校合わせて約8万名についての、署名についてもコメントを求められました。どの委員さんもそれについては、重く受け止めていると答えられていました。

第三推進委員会として、第3通学区全体を考えなければならないこと、推進委員会の方から、また新しい高校のプラスのイメージ等、より魅力ある高校づくりについても、お話をいただきました。簡単でございますがそれについては以上でございます。

以下、高校教育課野村主幹教育支援主事から資料説明 【説明内容省略】

## 6 議事

(池上委員長)

ありがとうございました。それでは藤本委員にご説明をいただければありがたいと思います。

(藤本委員)

後半のいよいよよまとめの段階に、推進委員会もなってきたわけですが、魅力ある、ということわれわれも議論してきましたが、なかなか時間がなく、いま一步、まだ検討が不足している状況にあるのですが、時間がもう少しあれば、もっと足が踏み込んでいるかなあと、そんな考えであります。

今日、ひとつプリントを用意したのは、地域の子どもはぜひ地域で育て、魅力ある地域高校を存続させるためには、連携型の中高一貫校というの、選択肢のひとつとして、地域高校、地域でぜひ検討していただけたらと。本来的にはこういうような議論に、十分時間をかけたかったのですが、時間がなかったのでまとめの段階でご提案しようと思って、

資料をつくりました。

そこに書いてありますように、平成 31 年度以降も生徒の急減期というのがやはり今後も続くわけで、もし再度第 2 次高校改革プランが検討された場合には、やはり私はそこでターゲットになるのは、地域高校と職業高校ではないだろうかと思います。都市部の高校がターゲットになりうるかなと。そこでやはり魅力ある地域高校として、地域の期待に応えられるような、そういう学校にしないと、地域高校が、第 2 次高校改革がもし検討された場合には、非常に心配である。

その中で、連携型の中高一貫校というのが、私はある程度可能性があるもので、可能な地域では、これから検討していただいたらということです。そこには文科省のホームページから、中高一貫教育校のグラフを、平成 11 年度からスタートして平成 17 年度までの推移のグラフを載せておきました。県教委からも以前、平成 16 年度までの資料が、出ておりますが、最新のホームページから取り出しておきました。

3 つのタイプがあるわけですが、私は連携型というのがいいと思うのですが、そのほかにはそこに書いてあるように、中等教育学校、併設型というのがあるわけです。ご存じのとおり、中等教育の学校は、まったくひとつの学校で、併設型というのは設置者が同じです。県立の中学校と県立の高校と、また市町村の高校と市町村の中学校という、そんな同一設置者の場合が併設型ですが、このふたつのタイプはどうしても、受験年齢の低年齢化、小学校の時点で受験があるわけですので、それから大学進学に特化した学校になってしまう、また 6 年間、生徒の関係が固定化してしまう、といった心配はあるわけですが、ご提案する連携型というのは設置者が異なっていて、県立高校と市町村の中学が緩やかな連携を行う、そんなタイプです。

次ページにいきまして、長野県の場合は実をいうと、2001 年の 3 月だったと思いますが、教育委員会の内部に中高一貫教育の検討会が設けられまして、一応導入ということで、以下のようなまとめがされております。

当時のまとめの資料をここに書いておきましたが、連携型については 2001 年 9 月をめどに市町村関係者から要望を聞いて、条件が整ったところから、2003 年度から設置を目指す、というまとめです。併設型についてはさらに検討して 2004 年度以降の設置を目指すということです。中等教育学校というのは、たぶん研究を続けるというまとめだったと思いますが、かつて長野県でも検討された経過があるわけです。ただそのまま、中断されたままになっているわけです。

次に連携型の中高一貫の図を書きましたが、一般的な図ですので地域においては、小学校から中学へは選択できませんので、小学校から中学へ行くわけですが、その中学校からは連携している地域高校に行っても、ほかの学校に行ってもいいわけですし、連携している高等学校には、ほかの中学校から行ってもいいわけですので、ここは縛りがあるわけではないです。複数の中学校と地域高校が連携するということです。教育課程なり教員の交流を、緩やかに連携して教育するということです。

進学以降にメリットと、4 番目にはデメリットというか、課題を書きましたが、メリットとしては、やはり継続的な教育で、授業が相互に中学の先生が高校に、高校の先生が中学にというような、授業の相互指導とか交流が出来る。

それから、その中から、地域の子どもを地域が育てる、地域の人材を育てるという、そ

ういった意味での、地域特有の魅力ある授業も、地域の人材の協力を得ながら可能である。それからクラブも、生徒数が少なくなるとなかなか成立しないということがあるのですが、合同で練習をしたり、合同で中高の交流も出来る。

それから専門の教科の教員の確保が一番問題になってくるのですが、先ほどいいましたように、例えば中学の音楽の先生が高校の音楽、高校の体育の先生が中学の体育と、授業の実践も出来る。それから施設・設備、理科室やコンピュータ、そのようなものも有効に活用もできる。選抜も非常に緩やかに、面接だけとか、そのような通学区です。ただ、教育職員免許法というのがありますので、中学の先生が高校にいったって授業を行う、高校の先生が中学に行って授業をするというのは、免許上出来ないという制約がありますから、それをクリアしなければならない。課題も4番のところに書いてありますけれど、地域の皆さんの声を聞きながら進めていかなければいけない。地域教育プラットフォームという案も、提案がされているので、それとの連携を計りながら、設置者が異なるわけですので、協力体制、相互理解、連携からスタートする、地域の協力が不可欠です。

そんなところから3ページにいきまして、実際、現実に関連した場合には、選抜をどうするかという課題もあります。それから連携した中学校と、連携していない中学から、高校側は生徒を迎えるわけですが、生徒の間で差が生じないか、そんな点も確かに問題点もあるわけです。

最後5番目にまとめとして、地域高校の存在が危うくなるというのは、私は2点あると思います。少子化と、もうひとつは市町村合併で、非常に危機感を感じているわけです。今後特に町村部、村では少子化がかなり進むと、財政状況によって、市町村合併が進んでいるわけですが、それがさらに進むと考えられることです。

多分、正しいと思いますがもし間違っていたら、取り消しますけれど、例えば浅科村が佐久と合併し、望月高校への財政支援をやめようとか、そんな動きがあるわけで、地域高校を地域の財産として支援してきた、村が町村合併で消えて財政的、人的な後ろ盾を失うという状況もあるわけで、やはり今後とも魅力ある地域高校を存続させていくためには、周りの複数の中学校と連携した、緩やかな中高一貫教育で地域の子どもたちを育てるということです。

第2次高校改革が、もしあるとすればそれに向けて、各地域でぜひ検討していただければということで、最終報告にもそんなことを、盛り込んでいただければと思ひまして、ご提案させていただきました。

(池上委員長)

ありがとうございました。今までの過程でご質問、ご意見あると思いますが、もう一点だけ発言させていただいて、それからお伺いいたします。

申し上げますのは、今後の日程の問題ですが、通常は最後のところで、次回はということですが、もう今回を含めて前回でもお願いしましたように、3回を予定していますので、その3回の中で何をするかと、いうことを先に説明を申し上げて、ご意見を拝聴してまとめていきたいと、こういうふうに考えております。

まず今日は、第1に各地域の状況の報告をいただいて、詳細をつぶさに検討していただいて、できる結論を出していきたいと、これがひとつであります。それからその過程で魅

力づくりの話が出て参ります。今ご報告いただいた、今日のもそういうことだと思いますけど、このようにさせていただきたいと思います。

次回には、私の手元で魅力づくり案についての、素案を作成をいたしたいと、今考えております。しかしながら私の手元というのは、あくまで「まとめ」ということでございまして、近日中にフォーマットを、まず委員の皆さんに送らせていただきたい、これがひとつです。そのフォーマットに基づいて、魅力づくり案につきまして案をいただいて、そのまとめをいたしまして集約いたしましたものを、次回にはご提示を申し上げたいと考えています。次回にはそれを検討していただいて、最後の時にはそれをまとめとして最終に持って行きたいと、こんな認識でいきたいと思いますので、今日を合わせて3回ございますので、そのようをお願いしたいと考えておりますが、もし問題なければそんな方向で、やらせていただきたいということでございます。それでよろしゅうございましょうか。

特にご意見がなければ、それでやらせていただきますが、今までの過程で事務局、および藤本委員からご提案がございましたので、その点についてご意見ご質問がございましたらお願いしたいと思います。

（小坂委員）

ひとつは生徒数の減の問題でございます。前回、岡谷から、中学校卒業者に対する疑問という中で、平成32年のそれぞれの学区ごとの、入学者数が表になっていますが、この統計はどこから付けたものなのでしょうか、31年の入学者は一応平成16年の出生数ということで、統計が出来ておりますが、平成17年度の出生については、いくら資料をさがしても公表された資料がないですし、これは教育委員会では、とらえているのかどうかまずお聞きしたいと思います。

（池上委員長）

それではお願いいたします。

（柳澤教育主幹）

32年の数につきましては、こちらの推進委員会、他地区もそうですが、県の資料としてはお出ししてございません。あくまでも検討委員会で進めていただいたのは、31年までの数字を見てお願いしたということでございますので、おそらく昨年の時期はわかりませんが、県の情報政策課で0歳児を出しているかもしれませんが、私どものほうでは集計しておりません。

（小坂委員）

私のほうでもいろいろ調べてみたのですが、そういう統計資料かない。もし関係者がおりましたら教えていただければと思います。

それからもうひとつですね、昨年の暮れ12月27日付けで、昨年10月1日の国勢調査の速報がこちらにあります。これは長期的に見て人口動態その他社会情勢を表す、私は重要な資料だと思っておりますので、一部で結構ですから関係の速報値、例えば諏訪地域で見ますと、茅野は県下の中でも安曇野市について、2番目の人口増という結果がでていま

すし、それに比べて岡谷市は相当数減っているという資料がでていますので、抜粋で結構ですから 7、8、9 通学区に關係する資料を、ぜひこの次参考までに出していただければと、このように思っております。

(池上委員長)

事務局では、今公然のところのデータですが、それはいかがでございますか。

(柳澤教育主幹)

検討させていただきたいと思います。

(池上委員長)

今の話は、そのデータをいただきたいということですので、よろしくお願いいたします。笠原委員、今の 32 年のデータは確かこの前の資料には掲載されておりまして、どこかの資料を使ったという事はそれはご存じでしたか。

(笠原副委員長)

それは私どもがつくった資料ではないです。

(池上委員長)

ではございませんよね、提出された資料ですね。

(笠原副委員長)

出所はわかりませんが。

(池上委員長)

それでは、特に傍聴されている皆さん私のほうで許可しますので、その出所についてご発言がもし出来れば、お願いしたいのですが。お願いできますか。

(柳澤教育主幹)

おそらく、報道關係のところで出された、数値を使ったということを前に聞きました。

(池上委員長)

そうですか。

(小坂委員)

もう一度確認いたしますが、平成 32 年に高校に入るというのは、平成 17 年度に生まれた生徒になるわけですね、そうするとまだ平成 17 年度というと、まだ 3 月 31 日までであるわけですね、そうじゃないですか。

16 年度ですか、私どももいろんなところから、情報公開も聞いておりますが、この出生数おそらく市町村別の出生数の公表された資料、データがないのです。どこから使ってい

るのか、今日でなくてもいいのですが、こういう数字が一人歩きしているわけですね。第7通学区は平成18年度を調べてほとんど変わらないけれど、第8、第9については大幅に減になっている。こういう資料が出されていてどういう根拠でこの資料が出されたのかということを、きちんとやっておかないと、われわれにとっても大きな誤りを犯すと思っています。

（池上委員長）

よくわかりました。傍聴者の中でご発言ございますか。

（岡谷南高等学校PTA会長：高野）

岡谷南高等学校PTA会長高野と申します。今詳しい資料、出生の原文がありませんので、「県民新聞」という新聞からで出典をそこに書かなかったのは、私としてもまずかったのですが、「県民新聞」かと思います。これはまた調べましてご連絡いたします。どちらに連絡すればよろしいですか。

（池上委員長）

事務局へお願いします。どうぞ、関係の事項ですか。

（長野県民新聞社編集長：加藤）

はい。長野県民新聞社編集長の加藤と申します。県の情報統計課から出ております平成16年の0歳児ということで集計させていただいた数字です。平成16年の0歳児です。平成17年の10月に県の情報政策課から発表された資料です。それを基に話をさせていただきました。4月1日現在の数字でございますので、若干の増減はあるということで、私どものほうで記載させてもらいました。以上でございます。

（池上委員長）

そうすると出所はわかりましたが、今度はその資料の公式な数字であるとかのいうことについては、あくまで推定ということになりますか。

（長野県民新聞社編集長：加藤）

県のホームページに載っておりますので、推定ではなくて4月1日現在の確定値でございます。

（池上委員長）

4月1日現在の確定値ですね。分かりました。では私どもの資料として、活用できるかどうかについては、もう一回検証させていただいて、次回で報告させていただくということです。それでよろしゅうございますか。

（岡谷南高等学校PTA会長：高野）

私どもからご報告よろしいですか。

(池上委員長)

こちらでやります。もう出所がわかりましたから。

(岡谷南高等学校PTA会長：高野)

はい。分かりました。お願いいたします。

(池上委員長)

はい。ありがとうございました。ほかにございますか。どうぞ。

(小林委員)

日程のことで、よろしいですか。

すいません。後3回しかないのもう一度確認ですが、今委員長さんから提案されたことは、最後については、答申案を出して、それをみんなが了解するかとどうかと、いうことですよね。とすると次回にはもう答申案の原案について、それぞれフォーマットを出してといわれたと思うのですが、そうするとそれぞれがかなり具体的な形で出さないとまずいということですよ。

具体的には、例えばどういう形でだされるかまだわからないですが、私でいえば地区で上伊那のことを述べていたわけですが、そうではなくて全体で3校削減、それから総合学科、多部制・単位制をどこに設置するかと、それについてのそれぞれの案を委員長さんのところへ、個人でということですよ。

(池上委員長)

多部制・単位制3校削減ということと同時に、魅力づくりですから、そこで具体的に部門を提示しないとお互いわからないわけですが、魅力づくりということを中心に考えているのがひとつ。

それからもうひとつは当然のことながら、例えば具体的に申し上げますと、箕輪に多部制・単位制を設置するという場合、魅力だけでなく問題点も発生してしまいます。現に上農の定時制では、「私の子どもはいつどこから卒業するのを分けるのか。定時制に現在在学中しておりますが、これから数年後に卒業の予定でございますが、私の子どもはどこから卒業させていただけるのでしょうか。」というようなやや手続き上の話もございます。そういったことも合わせて決めていただくことがひとつ。

それから下伊那地区からご要望があるわけですが、このご提案でまいりますと例えばファシリティは、例えば校舎は少なくとも学科自身は残しておく、という認識でいますと今日現在8クラスですね。これをどう収容してどう対応するのかと、いうことについてかなり難問に近い点でございます。これについてだいたいご提案をいただくと、これはむしろ問題点の整理ということになります。それも入れていかないといけないと思います。まあ問題点をどう処理するか、ひとつは魅力づくりをどうするか、という2点についてお願いしたい。ということでフォーマットの出させていただきます。いうふうに考えております。



(小林委員)

いいですか。そのところはわかりましたが、問題は下伊那のことはこれから出てくると思うので、それを基にして個々が考えられますけれども、諏訪についてどういう案が今日出てくるかわかりませんが、仮に諏訪について出てこなかった場合、新聞では先送りにするとか、学校名は出さないとか各新聞の報道しかわかりませんが、今日の段階でそうしたときには、フォーマットを考える時にそれぞれが考えたものを出すと、そういうふうを考えていいのですか。

(池上委員長)

それで結構でございます。

(小林委員)

はい。わかりました。

(笠原副委員長)

諏訪地区については、第11回会議の時に各通学区1校削減という、委員会合意に基づいて削減案を示したわけですが、これはご承知のとおり非公開という原則の中で、諏訪地区の議員6人のだけで検討した案であるわけです。

従って、地域の理解も得られた案ではありません。諏訪地区の削減案が11月23日に公になって以来、われわれも岡谷南、岡谷東の関係者はもとより、諏訪地区の多くの人たちと意見交換、話し合いを続けてきたところでありますけれども、あまりにも期間が短いために、地域の議論が十分尽くせない状況にあります。

これからも出来るだけ地域との話し合いを、続けたいと思っていますが、この推進委員会で議論をしていただくことは、結構でございますけれども、最終報告での結論をできるだけ急がないように、もう少し地域が議論をする時間を、いただきたいと思っているわけです。この推進委員会での慎重な審議をしていただきたいと、このようにお願いをしたいと思っているわけです。

(池上委員長)

具体的に申し上げますと、先ほど申し上げましたように、委員長とすれば今月のうちに、案は出したいというふうにイメージを思っていますが、できる限りという時間軸の問題ですけれど、それはどのようにお考えでございましょうか。

(笠原副委員長)

本音をいえば、19年度一斉に実施ということではなくて、地域によっては少し先へ送ることが可能ならば、そんなことも含めて入れていただければと思うのです。

(池上委員長)

問題点は第7通学区について、例えばほかに選択肢として他の案が出るかどうかという問題がひとつございます。可能性があるかどうかという問題に相成ると思います。そのあたりの議論があって、しかしながらやはりこの案でなるのかというふうに、私は認識しているのです。

そのあたりはいかがでございましょうか。時間をかけていっても第2案が出る可能性は、極めて低いということならそういうことのほうがいいでしょうが、ただ合意をするとなると逆にいうと、その事項を統合してよりよい学校にする案が、出るかどうかという方向に考えたほうが、いいのではないかと私はそうみたわけです。いかがでしょうか。

(笠原副委員長)

その辺も含めてまだ十分に、諏訪のコンセンサスも得られていませんし、まだそういうところまで話し合いが、進まない状況なのです。あまりにも時間が過ぎたということだと思います。

よその地区は、学校名が挙がったりしている中で、半年近く地域での議論があつてのことだと思いますが、諏訪の場合には11月23日だったわけですよ。それから1カ月という中では、十分地区、地域での議論というのはできない、出来ていないというのが現実です。われわれも各地区の推進委員だけで集まって、やったときもやはり地域の声を、聞いてやりたいという気持ちがみんなあつたわけですが、委員会の流れの中で非公開というのはやむを得ず、ああいう形になったわけですので、われわれにも地域の方々の話を聞く義務も責任もあると思っています。

(池上委員長)

今の話はよく分かりました。ただ問題のご発言のとおり厳しいし難しいでしょうが、選択肢がほかにございますかというところで、可能性としてはどんなところがあるのでございましょうか。

(笠原副委員長)

ですから、時間が短すぎて議論がそこまで進まないのですよ。

(柳澤教育主幹)

それぞれの通学区によって進め方は違っておりますが、それぞれこの場合ですと、区ごとの委員さんがそれぞれお考えになって、これまで各7、8、9とそれぞれの案をお出しいただいたわけですので、その流れからしますと推進委員会として、この第3通学区全体を見通した上で、それぞれ今挙げられた候補、そしてまた魅力づくり等の問題を、第3通学区全体として推進員会の中で、議論をいただいて一定の方向を、決めていただければと考えております。

(池上委員長)

申し上げているのは、しかしわれわれの議論は、大体 7、8、9 と区域をわけまして、それぞれご担当していただいてやると、いうふうな展開で考えておりますので、そのところで今笠原副委員長のおっしゃるように、そこまで議論が進んでいないよというご発言でしたので、それ以上申し上げたら酷ですが、私とすればその案がどうもベストで、この推進委員会としては他の案は、なかなか採用が難しいのではないかという認識を持っておりましたので。

(小池委員)

今まで感想や思いを込めながら、過去を振り返りながら一言述べますが、やはり私は推進委員の立場ではなく、同窓会や住民の立場で物事を考えた場合、特に 7 通の諏訪の場合、県のたたき台にないものを何で諏訪で出すのだ、この前も言っていますが、生徒数は減っていないではないか、学級減で対応出来るじゃないかという中で、はっきりいって何で諏訪で 1 校減なのか。しかも「痛み分け」といいながら、本当に痛み分けになっているのかと、このような感情が強くあるわけです。

中には諏訪の高校も今のままじゃいけない、なんとかしなきゃいけないというものは、諏訪人の底流に流れていると思います。この 17 年から 18 年のところで結論を出せといわれても、過去に県のたたき台に諏訪はなかったわけだから。つまり火がつかないわけですよ。そんなこと関係ないといわれれば、それまでのことになるかもしれませんが - 。地域の意識としては、今まで考えていなかったものがここへ来て案が出され、慌てて「さあみんなでどうしよう？」ということを考え始めたという今の流れと現実です。

私は以前から申し上げているのに、諏訪は（一校減は不必要）やる必要はないと、あえて言い続けているのです。ただ諏訪の 1 校減はもう規定の事実だと本委員会では決定付けられています。私はそのところの考え方に不満が残っていて、委員長さんが推進をしなければならぬ部分についても理解はしながらも、ずっと「何故だ」という気持ちが続いています。

そんな中、諏訪から 1 校減らす必要がないから減らさないと、基に戻してごり押しすれば、この会が空中分解をします。今までは我々は忙しい中何やっていたのだ、という思いがあって、非常なジレンマがある。今、委員長さんは、他の学校の案があるかといわれましたが、我々は部会の中で、諏訪部会の推進委員会の責任でやってきたわけですが、いろんな学校を考えてみたり、敷地を調べてみたりいろいろやってみました。それでその中でどうしてもとなれば「1 億歩譲って」というところへ来たわけです。あえて、もし諏訪がどうしても 1 校を、ということになったなら、「もう岡谷しかないよ」という意見が部会として出せた案なんです。

それに対して、先ほども地域の意識といいました。12 月 23 日、1 月 10 日に地域の会がありましたが、私は別の会合があってどうしても出る事が出来なかったのです。その中で具体的な意見は聞いておりませんが、個々の話を聞きますと様々な意見があったということです。それを今日、代案を出し結論付けをしなければならぬとなりますとね。無理です。

(池上委員長)

今日とはいっていないです。

(小池委員)

しかし後3回しかなくて、次には魅力ある高校づくりの試案を出して、最後に結論の文章化となれば、要するに今日だされた案で、それでいいかどうかということになるんですね。

(池上委員長)

今度は、他の選択肢がありますでしょうかと、申し上げていますが、それは議論で考えていて、最後には決着をつけましょうという手もあるわけです。

(小池委員)

そうなると、はっきりいって両論併記といってもそれでいいわけですね。

(池上委員長)

そんなことはまったく考えていません。両論併記というのは委員会としての結論を棒に振るということになります。

(小池委員)

「ただし書き」というのはどうですか。

(池上委員長)

私は考えていません。

そのことはこの間岡谷市役所で、8時半からやらせていただいて私も出席させていただいて、いわば白紙撤回はどうだろうかという文がございました。そのおりにはそれはもうないと、このように申し上げてそのことは、ご理解いただかないとは思いますが、そういう意思表示はしっかりとしたつもりでございます。

(小池委員)

それは新聞で読みましたし、下諏訪町の教育委員長さんから電話がきましたので、その状況はわかっておりますが、二案併記もない、ただし書きもない、答申文1本で決定していけということになれば、現時点で笠原さんがいわれたように、諏訪としては地域の理解コンセンサスも得られないので、はっきりいえば第3ブロック推進委の空中分解覚悟で、「できません。」「1校削減できません。」というしかないのです。

(池上委員長)

時間軸をどのくらいにとったら、よろしゅうございますか。

(小池委員)

私はこういう問題は、地域の方々や父兄の様な考え方もあると思うので、3年、5年掛けでもいいと思います。委員会としては「Aという意見やBという意見など様々な意見がある」ということで答申し、後は県の責任において丸投げをするという方向。私はそれでもいいのではないかと考えています。

(池上委員長)

これだけの委員がそろっておられて丸投げですか。ではわれわれは何を議論してきたのでしょうか。

(小池委員)

「こういう意見、こういう意見もある、こんなこともあるよ」と、我々委員が一生懸命に考えてきたそのプロセスが、県の方はわかっているわけですのでいいんじゃないですか。

(池上委員長)

逆さにいえばこういうことです。結論はひとつある。ただし付帯事項としては、こういう意見も出ていたと、いうことを書くことはやぶさかではないと思います。

(小池委員)

ですから、例えば諏訪の場合、2校の名前が出ていますが、「32年度のところまで見越した検討課題として、長期に考える」とかです。そういうことが付帯事項として付かなければ、「ボンと来て、ドドドとやって、さあどうだ」ということになります。各旧通学区で1校、痛みを同じレベルに合わせろという内容もあわせてです。そういうところを含めながらです。

(池上委員長)

そのこのところの議論は、蒸し返しになりますので。やりたくない。

(小池委員)

たしかに、私は蒸し返しを言っていますよ。

(池上委員長)

やりたくないんですが、そうではないというご意向も、他の委員からもあがったのですよ。別に痛み分けではないのです。理論的にそういう方向でいいじゃないかと、いうことでございますので、やや感情論に近いところは、やめたほうが私はいいと思います。

(小池委員)

その辺の所は私も言いながら、言うことが委員としてどうなんだと思いながら、思いながらに語っているわけです。今回そうにしろといわれても、まだ地域の方々のコンセンサスが十分得られていないことはわかっていますし、意見の会にも、まだ2回しかやってい

ないわけです。どういうふうに進捗委員会として答申を出すつもりなのでしょうか。私は出せないように思います。

（池上委員長）

どの地域にも、去年の6月から議論が始まって、それから確かに試案が6月に出了た。そこで、そういうことを県が考えていたということは認識しています。

（小池委員）

そうですね。

（池上委員長）

従って、そういうことに対応を始めたことは間違いないでしょう。しかしながら、われわれこの委員会、少なくとも9月からは諏訪もありきという認識で、議論したことも間違いないわけです。

確かに多くの皆さん方に、11月23日という日がひとつのポイントであったかもしれませんが、委員会としては9月からそういう論議がおきていると、いうことも委員としては承知していただきたい。

（小池委員）

それは理解しています。

（池上委員長）

またそれも逆に地域の皆様にも、そういうご説明をいただかなければいけない、立場だと私は思っています。それは実際のところは、それはちょっと酷かなという側面は、あることを承知しながら申し上げます。

（小池委員）

私は、例えば上伊那の箕工の多部制・単位制についても、ある先生から2年、3年前からその話があって、いろいろその話をしていたという話を聞いている。諏訪の場合は、県のたたき台がああいう格好で出されたのを受け、では第3通学区の場合はこういう形でいくのだと、いう認識がずうっとつながっていたわけです。それが1校削減先にありき旧通学区の中で各々、1校削減をという側面で、23日に一応これで決まったからそれでやりなさいと言うことなんですね。ただ諏訪の現実、やうと同窓会を中心に、これをどうするのだと問題になってきたところなんです。

ここで諏訪はどうするのかといわれれば、それでは私は、空中分解覚悟で「なし」といふか、もうひとつ「両論併記」で考えていくかを思いをめぐらせるわけなのです。諏訪は現実問題として、1校減はできないような気がするのです。

（池上委員長）

まず、両論併記というのは結論として、責任を放棄した話だと私は思っています。必ずひとつだけです。ただこういう意見がありましたと、いうことはずっと議論を聞いていただいた過程もありますが、文書で公式にはこういうふうな意見が、出ておりましたということは報告申し上げるという、範囲だと私は思います。

（小池委員）

ただし書きというものの、質的なものが問題になりますよね。例えば岡谷南、岡谷東の統合も考えられるという結論を出している。これを平成30年までの長期にわたる中で、検討するほうがよい、ということの話なら、どうでしょう。

（池上委員長）

多分だめでしょうね。あまりに長期すぎる。

（小池委員）

この時点で、私は諏訪の7区のことについては、何ともいえないですね。後はもう、責任もってこれはどうだ、とはいえないです。

（小林委員）

もう少し進めてほしいのですが、話がいつも堂々巡りしてしまうので、これからどうするかということで、いくつか問題をはっきりさせたいと思うのです。今諏訪から出ている問題を含めて考えてみたときに、ひとつ答申で出す場合このことは、共通議題にすべきかということは、すべて19年度実施という方向で、出さなければいけないのかと、場合によっては例えば諏訪のことが出ていますが、2年後とか3年後とかいう極めて明確にした形で、出すのも可とするのか。単なる先送りにしてしまうのは、委員長さんがおっしゃっており、無責任だと私は思います。

だから仮に議論が、煮詰まっていなくてもっと詰めたいとしたとしても、時期のことをある程度明確にして、統一しなくても全部3校については、統合または再編ですよ、統一して19年度実施としなくてもいいとなれば、諏訪の考えもある程度含めて出来るかなと思いますが、私は単なる先送りというのは反対です。ある程度明確にして、こういう方向で1年間なり2年間なり更に検討するという、案ならわかりますが、私はただ反対だから先送りというのは、答申としては全く不適切だと思います。それがひとつです。

それからもうひとつ、今回はっきりしておいてほしいのは、県教委の方で通学区別にそろわないと実施できないと、ということが新聞でも出ています。ところがいまだに教育長さんでしたか、そういうことも必ずしもそろわなくてもいいじゃないかと、葉養さん（検討委員会委員長）もそんなことをおっしゃっていましたが、県教委としてはそろわないと実施しないということになってしまうと、せっかく苦労した下伊那と上伊那がこれだけ大変な時間をかけて、大変苦労して出来たことがパアになってしまう。

どうしてもそろわなければならないとなると、何らかの形で不十分であってもそれなりの、諏訪に対するきちんとした方向を、出さなければいけない。だけでも必ずとも全部そ

ろわなくてもいいというなら、答申の仕方が変わってくるので、その時期のことと、そろわなくてはいけなかどうか、これだけ今日ははっきりしておかないと、それぞれそれぞれ考えてこいといっても、難しいかなと思うのです。よろしくお願いします。

（池上委員長）

よくわかりました。それで先ほども申し上げましたが、時間軸の問題なのですが、例えば2カ月待てばそういう答申が出来るのか、という世界を確認したいということが、この間にあると思いますが、そのあたりは笠原委員いかがでしょうか。

どのくらいの期間、2年も3年前からという観測は別にして、実際われわれが就任をしてから数カ月でここに至っているわけですが、そうすると9月、譲って11月どこまで議論ができれば、地域の合意を取れるでしょう。ということなのですが、どうでしょうか。難しいですね。

（笠原副委員長）

今のところ私も、見当がつきませんが、いずれにしても今回を含めて3回というのは、今月も1週間後に次があるわけですね。それはちょっと難しいかなと思います。

（池上委員長）

いつですか。1週間後ですか。

（笠原副委員長）

次回にしてもね。

（池上委員長）

それは難しいでしょう。

（笠原副委員長）

その辺のところだと、私は見当がつきませんが。

（藤本委員）

今、小林委員さんがいわれた中で、私はもう19年度は不可能と、こんなことを結論づけたら県教委さんに怒られますが、実質的にこれはもう不可能です。今から、中学校の先生、校長先生もおられますが、現場の方々に十分な説明をしたり、資料を配ったりすることが。例えば木曽高校の木曽西と木曽東の統合は、多分5年かかったですね。5年かかってその間に、校歌をつくり、校章を決め、教育課程を組み、それから両校が合同で運動会をやって、お互い、あれは女子校と男子校でしたよね、お互いに運動会をやったり、生徒会で交流をやりながら、そうして校歌もつくり、本当に細かいことまでやって、5年かかって統合したわけです。

そういうことで、地元の反対の中であれだけの統合が、きちんとできたという5年の実績をみると、19年なんて県教委さんも、腹の中ではもう無理だと考えていると思いますが、



もうほとんど無理です。ということは最低でも 20 年度以降、これはもう明らかなと思うのです。

それで地域の合意が得られたところから、20 年度以降にやっていただいて、確かに無責任に後ろにいくというのはいけないが、混乱の中でスタートすることはあり得ないのであって、だからもう 20 年度実施で、私は結論付けていますけど。何年後というのは、諏訪でもあり得ると思うが、19 年度実施というのは考えられないと思うの、その辺、県の答えはもう期待できないですか、どうでしょうか。まず 19 年度だけは駄目かどうか確認を、実質的には無理だと思います。

（柳澤教育主幹）

実施時期につきましては、前からも議論の中で出てきておりますが、同じ事の繰り返しのことしか申し上げられないわけですが、それぞれの通学区の推進委員会から、まだ報告書をいただいております。ぼつぼつ出していただけたところも出て来ているわけですが、そういう段階でありましてそれを受けて、今度は教育委員会として実施計画を策定していくと、いうことになるわけでございまして、今の段階では最初にお示ししたスケジュールで進めてきたということでございます。

（池上委員長）

私自身も、ある意味で素人でございますので、今の藤本委員のご発言の世界は正直なところよく理解できません。特に理解はできても、実際のところはわからないわけです。要するに校歌をつくって、校章もつくってという話になれば、それはなかなかどういう時間軸で考えるかはわかりません。19 年の話のスタートとして、そうするんだということならば、そのあたりのことは、私にはよく理解ができないのです。

委員会としての結論は、この委員はとにかく 3 月には、それまでにはわれわれは任期が、そこで切れるわけです。そうですね県からみれば、そういうことですね。われわれの責任としての結論は、少なくともぎりぎり引っ張っていても、ここのところの落としどころは、譲れない話になっちゃう。そうですね。

（小池委員）

今、例として言われたそれぞれの旧 3 通区、まあ 3 ブロックの中で、一部分についてなら積み残しがあってもいいということを、県は言ったような気がしますが - 。結局 3 つの 7、8、9 が全部そろわなければだめだということですね。今、例えていったその積み残しというか、うまくまとまらないところは置いておいておいてという世界もあってもいいような気もしますが、いかがですか。

（池上委員長）

ひとつ置いといて、われわれは 3 月のいっぱい結論をつけなければ、われわれは責任は、もう取れないわけですよ。

(小池委員)

そりゃまあ、そういうことですね。

(池上委員長)

そのような形で委嘱を受けている形ですから。先ほど小林委員のほうからもそういう話ございました。

ですが、とにかく、この3通から、3つの全日制を統合しなきゃということについての結論は、それがそういうふうにつけなきゃいけない。問題は、それから今度は極めて技術的な話があるでしょうし、難しい世界があるのですが、そのところは、県教委で検討していただくという範疇(はんちゅう)に、かなり入っちゃうんだな。まあいうふうに私は思っています。これは結論をつけなきゃあ。それは諮問された事項なんですね。

(小池委員)

まあ基本的には、付帯事項的な内容も、県教委はあるな、と認識しているということですね。付帯事項というか、ただし書きみたいな事項について、その3月以降県教委が考えることになる、大切に考えてもらえるわけですね。

結果としてとにかくこの委員会では、3つの旧通学区が足並みがそろわなければ、答申ができないということなんですね。

(小林委員)

藤本先生のご意見は、実は私もかなりそういう面はあり得るなあということは実際に思います。箕工の多部制・単位制にしても、私は、おそらく県教委が、実際に19年度に実施すると仮定した場合に、6月ころ募集要項ができてないと、多分だめだと思うんですね。それによって、いろいろな施設を整備したりしなきゃいけませんので、6月までにそこまで果たしていくのかどうか、ということを考えると、19年度実施っていうのは本当に厳しいなあってことはわかります。

ただ私は、この審議会っていうかこの1番の任務は、実務じゃありませんので、時期については、例えば19年度実施をめどにとしたとしても、実務的にいうと、1年ずれるとか2年ずれるというのは当然あると思うんですよ。だから実務のことまで私らが、責任を持ってやることはない、ということです、19年度実施は不可能だとかいうことはね、実際にはあったとしても、19年度を目途にということでもいいと思うんです。

たださっきいった、諏訪のことについては、実務のことよりも、まだ非常にまとまっていないということを考えたときに、じゃあどういうふうにするかといったときに、ただ「反対があったから出しません」では答申にならないので、じゃあこれについては、時期を決めるのはなかなか難しいにしても、何カ月または1年以内に、どういう方法でつめた推進をしたいというくらいの案を出さないと、答申案にならないと思います。そういう意味で、あんまり19年度、今ここで実施が可能か不可能かってことは、実務のことでもありますので、われわれがここで20年にしたらいいかどうかってことは、議論する必要はないと思います。

(岡庭委員)

本当は私は、この話はしたくないし、もともと推進委員会そのものだいたい最初から、もう結論ありきのことはやるべきじゃないと、ずっと思っていましたので。本当はいいにくいし、いいたくないことがいっぱいあるんですが、実は南信州広域連合の検討委員会の委員長の立場で、南信州広域連合の全体の意見をまとめた立場で、これはどうしても発言をしないといかん、と思っておるんです。

地域のコンセンサスが、取れるか取れないかってことは、要するにわれわれの第9区の場合だって、地域のコンセンサスが取れたとはいえないわけで、取れているとは誰も、思っているわけじゃないんですね。

そもそも11月23日の日、私ちょっと欠席して誠に申し訳ないと、あのときに本来、今の議論はやっておくべきだと思うんです。あのときに一時旧通学区1校ずつ減らそうじゃないかと、いうことを前提に、これから検討していかなくちゃならないということ、その日から第9区も拍車が、かかったわけですよ。

そういう形で、どうしたらやっぱりそのことを推進委員としては、そのことをどうしても推進委員会で、3人の委員の方向性として、報告しなくちゃならんと。だとしたら、どうしたらいいのかっていう形での、議論をしていただいて、最終的にああいう形になってきた、ということなのです。

ですから今になって、19年度を延ばそうじゃないか、どうじゃないかって議論をされても、これはやっぱりわれわれ推進委員会で、第9区は特に6回も委員会を開いていただいて、議論をしていただいてきたわけですから。あのときは、あの23日の話はなかったことだから、なんてことはいかんと思うんですね。

それともうひとつ、やっぱり推進委員会、これはいつも思いますが第9区の統合案だって、かなり私としては、難しいと思う案だろうと思うんですけれども。しかしそれは推進委員の立場として、そういう方向で考えてほしいと。それが魅力ある高校づくりにつながり、その高校削減の問題ともからみにして、そういうことになるんだということしていくので。

具体的なそのことを、どう進めるのかってことについては、校舎をどうするのか、あるいはそのことによって、その地域の人たちの具体的に進めたときに、理解を得られるのか、得られないのかということまで、推進委員会は考えて議論は到底できないし、そんな責任を負って、われわれは推進委員をやっているわけじゃない。

推進委員会としてはこういう形で考えて、魅力ある高校をつくるために、「この高校とこの高校統合した場合に、こういう形で魅力ある高校ができるんじゃないか」という程度の話しか多分できないんじゃないかと思います。それ以上のことを、やっぱりわれわれに要求されては、これは無理だろうと思う。

推進委員に地域のコンセンサス取って、各同窓会やPTAや皆さんから、「ようござんす」と、はんこをもらってこなかったら、答申案はできませんってことでは。それほどの責任をわれわれは、感じておるわけではないってことだけは、申し上げなれんと、こう思っておるわけでございます。

(池上委員長)

ごもっともなご意見だと思います。

(関 委員)

今、実施時期についてですが、それぞれの各地区から出た案についても、早く実施できるものとそうでないものと、難しい部分といろいろその差はあると思います。ですから、この委員会としては、遅すぎのご意見も出ましたが、「何年度実施」というそこまで踏み込んだ結論を出す必要があるものかどうか。私はそこまで踏み込まなくてもいい、と思います。そこから先の技術的な問題は、またその都度考えていくことではないかと思います。

それから、諏訪地区については11月の段階で出たわけで、とにかく時間はないわけですし、十分なその地域の理解は得られていないことは事実です。ですからせめて付帯事項として、何か付けるといことは、私は必要だと思っております。ひとつの案だけで終わることは、非常に諏訪地区としては難しい状況にあるんです。

(池上委員長)

今の実施時期の問題は、もうご承知のとおり県教委の問題だと私も思います。従ってわれわれは、どこの高校をどうするか、ということの結論を得るのが、われわれの仕事である、と考えておりますので、それはその方向で結構だと思うんですが。

この委員会としては、その他の学校については、いろいろ問題がありましようが、結論を段々得て参りました。後の学校について、1校についてあと半年1年までと、いう結論は私は無責任だとなるんじゃないか、と考えておるところです。それ以下のところは、いつも担当をなさる皆さんのところで、調整していただくと。こういうのが話であろうと思います。

今の付帯意見ということで、結論があって、こういう意見があるかと、いうことについては結構でございます。ではこういう意見というところが、どういう意見なのかというところが、今度問題になるところだと思います。

(岡庭委員)

その遡上に上った岡谷2校の統合の問題を、どう推進委員会で扱うということは、これを既定の事実として扱うのか、要するに進行状態って形で扱うのかという点で、委員長。

(池上委員長)

私はこれはすでに報告をされておりました。今の流れを見ますと報告をされておりました、そのものをそれぞれ認めていくという姿でございますので、以下のところでまいりますと、別紙論としてはもうほとんど、それは決まりというふうに考えております。

ただ委員会として、最終結論を出したかということになれば、確かにそれはまだそういう事態にはなっていないとはいえるかもしれませんが。経過から見ればそれはもう、それは結論ということなんですけども。大変、お立場が難しいので、そこはあまり詰めていきますと、問題が出るかもしれません。

(小林委員)

2 つお願いしたいのですが。先ほどから実施時期について、問題になっていますが、あまりこのことにこだわる必要はないと、それは私もさっき主張したとおりですが、ただ中学の現場からいわせると、いつになるかわからないってというような、そういう答申は中学生にとって非常に影響大きいかなと思います。ある程度目途ですから 1 年、2 年ずれるのは、しょうがないと思うんですね、そのくらいのことは表記されないと困ります。では例えば 1 年後にすると今度今の中 2 の子たちが、この学校を選択するかどうかってなりますよね。

そうすると、実施時期を一切明記しないということ、これはすべて県教委に一切お任せするってことが、はっきりしていれば、県教委のほうへその時期は、明記してくれるということなら、私は構わないと思いますが、そうじゃないとすると、ある程度の方向は出したうえで、当然ずれることはありうるということがひとつ。

それから 2 つ目に、諏訪のことについて、今日まだどういう方向かが、全くわからないままにいます。次回までに個々で考えて来いと、いわれているわけですけど、次回までに、今日それぞれ諏訪の方々から、まとまらないってことしか、今のところ出て来ないの、じゃあまとまらないという段階で、われわれが個人で何を考え出せばいいかっていうと、非常に厳しいわけです。

従って少なくとも、例えば岡谷南、岡谷東と統合っていう案は出ましたが、もっと具体的にした、例えば完全な統合なのか、またはどちらかを分校にして何年間は進めていくとか、またはどうしても不可能なら、統合とは少し形は違いますが、ジョイント化していくとか、その辺まである程度出してもらわないと、個々で考えてこいっていわれても難しいかなというのがひとつ。

それから、この今までの流れの中で、多部制・単位制については出てきましたが、いまだに総合学科の記事は出て来ない。残る諏訪で本当に考えられるのかどうか。確かに塩尻とは近いことは確かですが、近いということを優先するのか、本当にここの第 3 通でひとつずつひくるべきかという、それによっては、地理的に近いどうってことよりも、そっちのことを優先したほうがいいって問題もありますよね。そうすると、その辺のところは、それぞれが勝手に考えて、この辺に総合学科をつくったほうがいいと、いうことを出していいものか、非常に迷います。

ちょっと、次の個々が考えて来いっていわれるまでに、その前までに諏訪の方々大変だけれども地域の方が、反対しているかどうかということは別問題で、あくまでも諏訪の推進委員会の人たちが、もう少し具体的にするとこう、だけれどもこれはその実際こういう案も考えられるけれども、さっきのコンセンサスのこととか施設の事を考えて、難しいとか、それこそそういう課題も出してもらった上で、個々がこれを選択するべきです。例えば統合ということよりも、諏訪にぜひ総合学科をつくったほうがよかぬえか、ということだって考えられますよね。

その辺のところを、個々勝手に考えて来いと、いわれても厳しいもんですから。次回までうんと忙しいけれども、諏訪でもう 1 回もうちょっと煮詰めていただいて、それぞれのところへ送っていただいて、それを基にして最終案を考えるということをしなないと、ちょっとこの 3 回では、答申はちょっと無理じゃないかと、私は思うんです。それが諏訪の方々

に、やっていただけるかどうか。

（岡庭委員）

もう皆さんで言っていることは、十分わかるんですけども、事をずっと進めてきたその段階から考えてみて、フィールドバックして議論をするということは、これだけやっぱり住民の皆さん巻き込んできている、上伊那も下伊那も。巻き込んできていて、またフィールドバックしてそこからって、またそこから初めていかなきゃならない。推進委員会何をしてあったんだって話になってくるわけで。

そういう点では、私は先ほどお伺いしたのは、岡谷の2校の統合ということで1校削減ってことが、諏訪の推進委員の結論が出たとするのは、その方法としてどういう方法があるのか、住民の皆さんがご納得いただける方法が、あるのかないのかって議論は、これはやっぱりされてもいいだろうと思うし、それはやっぱり十分していただかないと、ならないだろうというように思うんです。

こここのところまで、もう1度崩して、どうこうという話になってくると、この推進委員会は結局3月までには、結論を出さずに終わったと。これだって私は冒頭のときにもいった、それでもいいって県教委がいったんだから、いいと思いますが。

しかしわれわれだけがやってきたわけじゃないし、本当にたくさんの住民の人を巻き込んで、今日ここまで来ているということからすれば、われわれの責任っていうのは非常に大きいと思う。

特に第9区は、これだけ人数の中で、推進委員3人しか呼ばなかったでしょう。盛んに部会を、設置してもらいたいってことをいっているけど、それも認められなかった。それも部会を設置したら、絶対反対な意見しか出ないんだから、部会設置したらまずいって話で、そういうプロセスの中で、やっぱりやってきたってことが、十分諏訪の皆さんにはご理解いただかなければならないかなと、思っておるわけです。

（池上委員長）

小口委員、見解はいかがですか。

（小口委員）

諏訪でもいろいろな検討やっておりますし、そのいろいろな話を聞く中で、やはりもうこういう問題は、自分たちの問題にならないと、非常にどこも考えないなあと、そういう感じもいたしますし、それから特に諏訪の場合については、その広域行政合併という動きもありましたが、まあそれもだめになった。やはりその個々という色彩が非常に強い地域でありまして、そういう意味でもまとまりにくいと。こういうその土壌があるなあと、そんなことを痛切に感じております。

さきほど岡庭さんのお話のように、やっぱり地域コンセンサス、ただ諏訪からいわせると、その第9区のほうについては37人の会があって、まあ岡庭さんがリーダーシップを取ってやられたというようなことは、やはりきっちりとした実績があって残っておりますが、そういうことも諏訪ではちょっととむずかしいと私は思います。

ですから地域コンセンサスについては、もう取ろうと思っても諏訪ではまず無理だと。

そのような感覚を持っております。そういう意味ではこの委員会としては、やはり結論は出すべきではありますが、一言、そういう地域コンセンサスのことについて触れる、という程度でいいのではないかと考えております。

むしろさきほど小林さんがおっしゃったように、どういうふうに諏訪で総合学科というのを、検討できるかということについては、今度は諏訪地域のオープンな会として、また、それとは別な観点からの、取り組みになりますので、その2校統合という問題とは別の観点になりますので、オープンな議論を囑す大いにいい場所だと思うんです。

ですから何とかしてそういう場を、まあわれわれがいいのか、県のほうでやるのがいいのかは、ちょっとわかりませんが何か考えてやったほうがいいと考えております。

(池上委員長)

今の話ではよくわかりました。しかしながらちょっと拘泥しますが今の2校についてはどのようにお考えでしょうか。

(小口委員)

2校については基本的には、諏訪地域のメンバーはああいう案を出したわけですから、ぜひこの場で、そういう案を了承いただいて、いい方向を出していく。

そしてやはり、「ただコンセンサスについては、諏訪は非常に取りにくい」という文については一言入れる、ということじゃないかと私は思います。その後は県のほうに投げるということではないでしょうか。

(池上委員長)

具体的にいうと、これでよろしゅうございますか。例えばこの結論としては、今お話の小林委員のご発言もあったし、岡庭委員のご発言もございました。とにかくいい学校に、とにかく統合してやっていこうと。で、それからひとつの選択としては、総合学科があることという話を含めて、結論をとにかくひとつにまとめていこうということがひとつ。

しかしながら意見がいろいろございましたので、みんな付帯した意見としてこういう意見が出ています。というような結論を書いてございます。ということでしょうか。

(小口委員)

諏訪もメンバーの出した案については、そこを2つを総合学科にしようという案では多分なかったように思います。諏訪全体を見たときに、どこを総合学科がするかっていうのは、もう1度今度は住民のオープンな場で話をしながらやっていくということで。早急にそういう住民の意見を聞きながらその後をまとめると。こういうことじゃないかと思います。

(池上委員長)

では、委員として諏訪の委員としては、2つの学校を統合するという意見でありますか。

(小口委員)

はい。

(池上委員長)

これはそうですね。しかしながら全体3通、なかんずく諏訪の地域として例えばどこかの学校を、今度はターゲットまたはどこかの学校なくても、総合学科をどうにか仮定であっても入れても、それによってこの地域の高校の質は、ぐっと上がるはずだということを早く検討しましょうと、いうことでよろしゅうございますか。

(小口委員)

そんなことが、いいかと思います。

(藤本委員)

われわれや、上伊那が密室などといわれておりますが、結論付けたことが、9区の岡庭委員さんの飯田地区が、非常に地域の声を聞きながら、時間をかけて議論をしているのを我々が急がせたという、そういうところもあるわけなんですよ。

そこで諏訪として、私は、先日も学習会に出たのですが、1校減ということは、これは諏訪でも、もう決まりだということですので、確認ですね。

ただ、諏訪の1校減はやはり生徒が減ってきた状況、31年に減るのはもう事実なんですから、一時的に増えたり、平らではあっても、だから1校減はやむを得ない。けども、諏訪として譲れない点は何かといったら、実施時期です。

それと、もうひとつは、われわれが出した南校と東校の案は、やはり住民の意見としては未熟であり、全体で、もうちょっと諏訪地域がいろいろ、各高校について、茅野、下諏訪、諏訪の方もみんなが考えたところで、南校と東校にこだわらないで、そこでコンセンサスを得て、例えば東校になればいいし、別に清陵になったって、茅野になったっていいわけです。だから学校名については、ちょっと未熟であり、もうちょっと地域でどうするか議論を。

それから実施時期については、上伊那、下伊那より、やはり若干、少し遅らせていくべきで、やっぱり生徒数で、1校減については他区とは別にやる、これは私がまとめの時に発言します。苦しい立場での発言だけど、時期についてはやむを得ない。そういうことですので、答申のまとめ方がどういうことになるのかわかりませんが。

私はさっき小口委員さんがいわれたのですが、諏訪が今、本当にまとまって議論ができるかというのが1番心配で、例えば諏訪の方、上諏訪の方も出て来て一緒に議論しましょう、茅野の方も一緒に議論しましょうといっても、なんか自分のところに火の粉がかぶるのが心配で、今は、岡谷だけみたいな議論になっている感じがします。

私はここの委員全員で7区を議論していただいて、例えば小林委員さんが、いや諏訪清陵と二葉で当然ひとつだなど、いろいろ議論していただいて、それをまた材料に地域で議論する。諏訪の皆さん6人だけで議論しているんじゃないくて、まあしますけど、ぜひ皆さんも、第三推進委員ですので、ここで時間があったら、清陵とか、清陵、二葉が当然だとか、茅野がどうだとか、ぜひいいいただいて、全員で議論をしていきたいなと思って



いるわけです。

だから確認しますと、1校減で、ただ実施時期については、やはり生徒数が増加する状況下では、やっぱり8区、9区とは別に。ただわれわれが出した、南校と東校はあくまでもひとつのたたき台ですので、もうちょっと、そのほかの地域で、それを含めて議論をする時間が必要です。

（池上委員長）

よくわかりました。わかりますが、その実施時期の件については先ほどのような議論がございますので、これはいつができるかどうかは、ある意味ではわれわれの範疇（はんちゅう）でないとそのような。

（藤本委員）

だけど、われわれとしては、意見をいえるわけですよ。答申の中で。

（池上委員長）

ええ、そうですね。

（藤本委員）

それをまったく県教委に、お任せというわけじゃないんで。われわれが、その時期を、21年度以降にしてほしいということは、あくまでも、県教委が決めるとしても、われわれはいえます。

（池上委員長）

それはおっしゃることはわかりました。今のただ2校の議論ですね、1校減はもう、もともとそうですし、まあそのことは問題じゃない。あと2校についてはそれもあれですか、議論が未熟であったという立場であります。

（藤本委員）

東校、南校の件も

（池上委員長）

はい。

（藤本委員）

未熟な議論の中で出て来た東校と南校の案ですので、それもひとつの案ですけども、もうちょっとほかの案も含めて、地域で時間がほしいと。

（池上委員長）

それで私は冒頭で、ほかの案はございませんかと、伺いましたが、なかったわけですが、ということをお聞きしたのですが。

( 藤本委員 )

現時点ではありません。

( 池上委員長 )

極めてこの地域からの委員たちは、難しい議論だと思うんです。もちろんやることはやぶさかではないですし、建前上この委員会の中でそのようなことが、もう正論でありますけど。実際は難しいと思うんですが。それはやることはやぶさかではございません。と思っているのです。

( 藤本委員 )

なんだか、助け船のような気持ちがあるんですよ。

( 池上委員長 )

うん、それは分かります。

( 藤本委員 )

もちろん部会でやるんですけど、最終的にはここで、全体で議論する。全員がこの第 3 通学区の推進委員ですので。これで諏訪が出てきますと、上伊那、下伊那についても。今私は、上農定時制ともいろいろ関わっていますが、3 通の推進委員ですので、委員さん方にいろいろ意見をいっていただければ。それを持ち帰って、さらにできるだけ諏訪全員の議論にしたい。

( 池上委員長 )

わかりました。というご意向でございますが、いかがでございますか。

( 川島委員 )

今、旧第 7 通学区のほうで、地域のコンセンサスが得られないんで、実施時期を、考慮してもらいたいってというような発言があるんですが、実施時期うんぬんという問題ですね、それはやっぱり、これは総論の部分だと思うんですよ。

第 8、第 9 にしたって、19 年度からやってもらいたいって、考えているわけじゃないんで。つまり地域のコンセンサス理解、協力を得てもらいたいというのは、あくまで総論部分で、別に第 7 に限った話じゃないと思います。

そのところを理解していただいて、推進委員会としての意見は、目途としては、19 年度実施というような方法で議論していかないと、まとまらないと思います。諏訪だけ遅らせてもいいんだということになれば、やっぱり飯田、下伊那も理解も得られないという気がいたします。

(池上委員長)

わかりました。そのとおりですね。諏訪としては、逆にいえば公募をしたらいんじゃないんでしょうかと、先ほどの小林委員ではありませんが、そういうところがあれば私はやったほうがいいと思います。

(川島委員)

先ほどの、岡庭委員のご発言ありましたように、やはり今、地域の理解の承認を得て、それでここへ議論をもってこいっていうところでも、やっぱり責任はないと思うんですね。この推進委員会として改革プランを基にして、推進委員として協議した上で、推進委員としては、この案がこういった具体的な案がいい、という結論に至りましたで、十分だと考えます。

(池上委員長)

はい、あのわかりました。

(小口委員)

川島委員さんはそのようにおっしゃいますが、私どもの諏訪地域としての出した案はあのとおりですが、やはり地域としてコンセンサスもなかなか得られることは難しんですが、諏訪の場合にはいかにも拙速だということは、これは免れないことなんですよ。

ですからやはり、この実施時期については、ここでどうこういうよりは県に投げるか、あるいはいかにも拙速だということで、地域コンセンサスを得られていない、という文は、なんかやっぱり付け加える必要は、私はあると思うんです。

(岡庭委員)

私も大賛成です。私も答申書には、必ず今回の県教委の進め方については間違っている、ということだけは書いていただきたいと。こう思っておりますので。

(池上委員長)

よくわかります。ある意味で私もよくその意見に賛成でございます。きのうも課の会議があったりして、そういうふうな。私はまあ違う立場では、いままで議論をしてなくて、急にこの議論をわれわれのほうからしてやれと、一体なにごとだ、ということを申し上げたい経緯もあります。それはこの委員長の席でいうことではないと。

(小林委員)

さっき藤本先生がおっしゃったことは、原則としてまったくそのとおりだと思うんですよ。諏訪の人が諏訪のことだけ考えていくという、まあ本来推進委員会としては、それは本当じゃないと思うんですよ。ただ現実問題として、皆さんこういう大勢いるところですね、ほいと諏訪のA高校が統合したらどうだなんてことは、かなり材料をそろえているでないと、簡単にいえませんよ。

従って、諏訪以外の人どうですかっていわれれば、みんなさん沈黙しちゃうだけ。それ

は沈黙するというのは、材料がないってことと、校名を出した場合に、その波紋がでかいということは誰でもわかっているから、簡単に出せないと、2つあると思うんですよ。

従って、どうしてもそういうことおっしゃるなら、ある時期までに個々のまさにさっきいったフォーマットというのを、諏訪の笠原先生なり誰かのところにお渡しして、私はこう思う。そりゃもう多少分析は不十分ですから、はたから見れば無責任だと思われるかもしれないけれども、出せっていわれりゃ、それしか方法がないもんです。

ここで議論しろというのは極めて無理かなと。ですからどうしてもって言えば、いついつまでに全員とは無理にしても、なんとか諏訪まとまってほしいからって、私はこう思うっていうのをあつたら、いついつまでに出してほしいと。これで諏訪の人たちがそれを材料に自分たちの考えを含めて、検討するのは、どうですか。

(小坂委員)

この議論は、案当初、下伊那のほうからおそらく地域にいつて見ましようという案があったわけです。そうした中でやはりこれは3校ということであれば、各グループ1校ずつ痛み分けをしよう、こうすることで合意が得る。そうした中で初めてそれぞれの部会を設けて、私ども上伊那が1番早かったわけですが、そしてその次に下伊那ではまとめていただいて、そして諏訪も6人の委員さんの中で全体で1校減らすということになれば、どこがいいのかなと。私はおそらく客観的な考え方で、この岡谷南と岡谷東を出してこれらたと思うんです。ところが出してきてみたが反対が多いんで、たじろいでいるっていうのが、委員の皆さんの偽らざる、私は心情だと思うんです。小池さんそうじゃないですか。

(小池委員)

私は、もともと必要ないですよ、といてきているわけです。

(小坂委員)

いやいやでも、6人の諏訪の委員さんがお集まりいただいて議論をしてきましたよね。

(小池委員)

先生が先ほど併起をしてくださいって言ったのを、聞く必要ないということですか。でもどうしてもってことになったら、それも考えられるってことですか。

(小坂委員)

いやいや、もしそうであれば、諏訪は結論出てこなかったわけですよ。ところが11月23日の日に、諏訪はよくまとまったと私ども考えた。おそらくそれぞれの中学校長さん、高校の校長先生それから藤本さんたちが、まあこれは本当に私は高校教育のエリートだと思うんですね。そういう皆さんが諏訪で1校減らすにはどこがいいのかなあということの私は結論だと思うんですね。

ただ、それは私どもも重く受け止めるし。例えば私どものところだって、それでは上農高校の定時制をなくすなんてこと、コンセンサスを得なければいけません、やむを得ずそれでまたPTAで、どうしてもやってほしいとかいろいろあります。だからそれは、今

までのこの委員会の議論を曲げれば、私はそういった意味で、ここで諏訪の案をどうのこうのっていうことはやはり。私は部会へお任せをしたと。部会でお任せをしたんで、そこでやはり収斂（しゅうれん）をしてもらう。

ただ唐突であったということは、これは否めないと思いますので、これについては実施時期その他考慮する必要があるだろうと、私は思うわけです。やはり堂々巡り、また基に戻ってしまったんでは、私は何のための推進委員会であるか、やめたいぐらいですね。そんな堂々巡りすれば、私はこの委員会としての体面が保てないと思います。以上です。

（北原曜委員）

今、市長さんがおっしゃったのと全く同意見ですが、結局、逆戻りしているんですよ。実施時期とか住民の完全なコンセンサスというのは、文章に載せてはいいかもしれませんが、あくまでも判断は県教委のほうにあると思うんですよ。われわれは、その方向性を示せばいいということだと思います。

それで1校減は確認したということは、もうさかのぼっても7月か8月位には議論されていて、9月には「ピン留め」されていたわけですね。これをさらにそこまで戻る、あるいはそれより前に戻るということは、もうとても考えられないことだと思うんです。それでさらに、7区で対象校をこれから議論すると、住民コンセンサスで議論していくということになれば、じゃあ一体誰がいつまでに決めるのか、ということだと思うんです。

やはりわれわれの立場というのは、3通全体を通じての代表の委員なわけです。それで個々の地域や関係者の代表ではないのです。地域代表じゃないんです。ですからわれわれは、その3通全体見渡して議論していかなきゃいけない。完全なコンセンサスなんて絶対無理です。やはり対象校になったところは断腸の思いだと。われわれだってもうすべて名指しで決めていくわけですから、苦渋の選択をしているわけですね。

これを答申に書けないとなれば、すべて白紙です。他の高校にも波及するわけですね。魅力ある他にいろいろな方法に問題がありますから、その問題まで言及できないわけです。総合学科校についても全然言及できない。これはわれわれとしては、もう白紙撤回しか、白紙そのものです。

やはりその辺は、具体的な校名を出してやらざるを得ない。それは苦しいのはわかります。だけれどもわれわれはあくまでも、地域代表者ではないのです。ということは肝に銘じていただきたいと思います。

（池上委員長）

わかりました。大変な苦しみです。時計では、あともうちょっとで休みに入れるんですが、丸茂委員いかがでございますかね。今の議論の中でご意見がございましたら。

（丸茂委員）

はい。ちょっと私は意見がまとめきれていないので、申し上げられませんが。

(小池委員)

ちょっと、ちょっと一言いいですか  
同じことというのはだめですか。

(池上委員長)

同じことは、もうやめましょう。

(小池委員)

ただ各委員さんのいわれていることっていうのは、われわれも本当にどの委員もある意味一生懸命考えた案ですよ。地域性の制約とか、地域の利権代表なんていう考え方ではなくて、委員としての責任の上にやってきているってことだけは、わかっていただきたいのです。そのところだけ言いたいわけです。

(池上委員長)

すみませんが、この場内の時計の表示で55分までお休みをしたいと思います。おねがいします。

【休憩後再開】

(池上委員長)

それでは、時間がまいりましたので再開をいたしたいと思います。

それでは、他地区の問題もございますのでこのような結論でやらせていただきたいのですけれども、いろいろご意見を拝聴して、どうやら実施時期等については、意見も挙げるべきことが妥当なところでしょうし、われわれとしてもそのことでは技術的な側面を考えれば、必ずしも全部言及できるわけではありませんが、そのことを一文として入れるとしても、時期も次の会の冒頭で、この7区については、結論を決議したいと、こういうふうに思っています。かく申し上げるのは、委員の中には他に替えられれば代案は、基本的にあまりないということが、ひとつ大きな理由でございます。

また、他の地区からこの諏訪の地域について、意見について言及するというのは、あったとしてもなかなかこれまた適正な意見に、なるかどうかということもございますので、そういう立場で結論を、次回には出させていただきたいと考えております。

その理由は、次回に得ておかないと、もう最終回の報告には間に合わないということになりますので、そのようにご承知おきをいただきたいと思います。

それにつけても、各委員の皆さんについては地域の皆さんに何分のご了解をいただけるように、一層のご尽力をいただきたいと考えております。よろしくお願いいたします。

委員として、委員会としてはそういうまとめをしていきたいと思っておりますが、よろしくお願いいたします。

それでは今度は7区についてはそのような結論にさせていただきますが、8区の箕輪の問題について、議論をさせていただきたいと思っております。冒頭に委員長のところと、それが

ら8区の委員の皆さんに依頼がございまして、多部制・単位制に上農の定時制を吸収すると、ということについての説明の会を、催していただきたいと。

趣旨は、当然のことながら、意見も述べる機会があると思いますので、そういうことで、前回の小坂委員のほうからも、先ほどの実施時期ではありませんけれど、具体的な、技術的な側面でどういう方が、よいかということの検討が必要だと、いうご発言やまたは藤本委員からは、時期についての、これは時期についての特定した意見でございましたが、本人も望みましたので、これも併せてご検討がいただければありがたいなと、こういうふうに思いますので、よろしくお願ひしたいと思います。

小坂委員いかがですかね。

(小坂委員)

この前申し上げましたが、上農高校の定時制については、長い歴史があるわけでございますし、卒業生も相当数おります。しかし現在は、いわゆる普通の高校に適應できないような子どもが相当数いたりで、こういうことで親御さんにしてみればですね、そういう家庭的な雰囲気の中で、今の教育が本当にありがたい、こういうことなのです。これは県教委の考えからいえばですね、少なくとも10人近い職員が、100人以下の生徒を見ておるわけですから、効率からいえば一番悪いです。従ってですね、建物、その他施設についても、まさに劣悪だと私は感じております。

そうした中で、多部制高校を箕輪へ移っても、そういった配慮がなされれば、当然定時制に行く生徒というのは、そういう生徒も多いと思うので、それを引き継いでもらうような、多部制高校にやっていただければ、私は、いいのではないかというふうに思っており、振興会の会長というような立場で、こういうのもあれなのですが、やむを得ないことだと。

今のままの状態ではまさに、本当にぼろ校舎でですね、あの施設を何とかしたいということもあります。

(池上委員長)

ありがとうございます。藤本委員これはこの前ね。そういう話題が諏訪のほうの問題でありましたね。

(藤本委員)

今回の高校改革で私が一番心配しているのは、やはり多部制・単位制だと思うのです。本当に、失敗したときは大変かな、うまくいけばいいんだが。

なぜかという、多部制・単位制という学校が、前々からいっているように、ホームルームもない、学年制でない、そういう中で今の定時制の生徒たちが、対応できるのかということが、一番心配です。

さらに、心配しているのは、あまり大きな声でいいたくはないのですけれど、例えば多部制・単位制が出来たときに、安易に全日制の子どもたちが、多部制・単位制に行くのではないか。多部制・単位制はご存じのとおり、例えば午前中はアルバイトしよう、午後適当に2時間授業を受けよう、卒業できなかつたら卒業できなくてもいいよ、4年で、5年で卒業できればいいだろう、適当にアルバイトしよう、今日は気分がいいから授業に出よう

と、いったような。または、そういう問題があるから、3 修制ということで、非常に縛りがかかってきたりする。

さらに、例えば3分の2だけ学校に出ればいいわけですので、1 学期、2 学期学校に出たら3 学期はもう全部欠席してもいいのだと。それから、74 単位とればいいのだから、今、全日制の生徒たちは90 弱の単位を取っているのに、74 単位とればいいのだから、もう74 単位取れた、あとはもう学校へ行かなくてもいいと。それから、履修と習得が一致しないのですから、授業の3分の2 出たからこれで履修だと、習得はしなくてもいいや、あとで、テストを受けると。

いろいろなことが考えられるわけですね。ですので、確かに小坂市長さんはじめ8 区のみなさまに、検討していただいたのは、本当にさすが十分検討していただいて素晴らしい、そこまで配慮していただき十分検討していただいたなあと、本当に、私はあれを読んで、感心したのです。

ただ、静岡へ行ってもですね、いろいろなところへ行っても、一定のかなりの競争率、人気が出てくるわけですね。そういう競争率が出てくる、足きりがある、定員があれば入試をやるわけですね。そうすると、安易に全日制の学校よりも、楽な学校として選んだ子どもたちによって、はじき出される、定時制の子どもたちは。

それから、やはり先ほどいいましたように、そういう生徒を除いて、3 修制ということがうんと強まって、3 年で卒業する、3 年で卒業しようという学校として強まってくると、また、そこでも定時制の今の子どもたちは、対応できないというようになるわけですね。

現に、松本地区でも、うまくいかないと本当に地域の迷惑に昇、まああまりいい言葉ではないけれど、非常にご迷惑をかけるわけです。学校に、ある時間だけふらふらと行って、今日はバイトだ、バイトがないから今日は授業だといったような生徒がいる。だから、そこら辺を見極め、県教委がお金をかけて、立派な多部制・単位制で、そういう子どもたちに配慮されたい。このあいだの案でも少人数にするだとか、いろいろ確かに書いていただきまして、非常にありがたかったですけれども、それを確認できるのかといったらおかしいのですけれども、県教委がきちんとやってくれるのか。だから、私は絶対反対ということで。小坂市長さんがいわれたとおり、あの施設、あの体育館を見たら今からでもつぶれるのではないかというものです。今まで県教委があれを放置してきたこと自体が、問題であって、へばい体育館だから統合だというのは、何かおかしい話です。

その、見極めをぜひしたいというのが私や、本日の皆さんのお気持ちでは。けれども、お金のない中、そして出していただいた案は非常に、素晴らしい案ですけれども、それが100 パーセントでも、IT 関係の設備など、施設整備もいる中で、19 年だということになると、私はある程度の期間、やはり今の定時制を残していただいて、その間に多部制・単位制を充実させていく、生徒たちの要求を聞きながら、設備を整備していくというのが譲れる点だ。もちろん、ずっと残すのが、私はいいのですが、やはり見極めたい、いい学校にしたい。それまでは、少なくとも、19 年度からではなく、延ばしたい。

私は、例えば、松本筑摩高校に行って、たばこを吸ったりだとか、校外に出て行くとか、やはりそういう子があるわけですので、多部制・単位制というのは、やはりいい学校に、ぜひしていかなければいけないので、決まれば職員はもちろん、いい学校に最大限努力するわけですけれども、その、確証に一抹のやはり不安がある。



さらに、1、1、1 というクラスが出来たとすると、上伊那だけで人員が足りるか、果たして下伊那から通えるのか、諏訪の生徒はさて上伊那まで行くのか、果たして、本当に人数的に成り立つのか、ひょっとしたら、諏訪の高校からも、午前中はアルバイトで午後からという子が、わんわんに行くのか、そこら辺の見極めが、私個人もさっぱりつきません。

その点で、19 年度ではなくてはやり、いい学を校つくる、そういう意味での見極めの時間が欲しい。願わくば、残していただきたいんですけども無理でししょうか。

(池上委員長)

それは事務局で、今のような総論的なご発言ですから、総論的なご回答で結構ですけど。ご発言ございましたらお願いしたい。

(米澤教育次長)

それでは、私のほうから回答させていただきます。今藤本委員さん非常に多部制制のこと、たくさんご存じでご発言いただきましたが、本当に懸念ということで心配な部分ばかりたくさん出していただいたので、また、不安が募って来るかもしれませんが、すべてやりようで解決できることばかりだなと、いう気がしておりました。

例えば、3 分の 2 だけ出ればいいのか、3 学期制を想定してお考えですが、例えば、前期、後期の 2 学期制というようなことで、学期ごとの単位認定ということも可能ですし、そのことによって今のことは多分に解決されたり、それから、全日制から安易に来る生徒によって今のこちらの生徒が、はじかれるのではないかなというようなご心配もいただきましたが、その全日制から安易に来ると、決め付けていらっしゃるようですが、今度単位制ということで、積極的に来る子もいたりするわけであります。

ですから、安易ということでご心配いただきますが、相談機能とかホームルームなど中心とするものが無いという、これも前提であります。そうではなく、実際にホームルームというものをつくって、ガイダンス機能、相談機能を充実することによって、単位制もうまく運ぶことができます。

ですから、単位制無学年制ではありますが、ホームルームというのもしっかり持つ。相談機能、ガイダンス機能しっかり持つことで、これらの問題も解決できるものがたくさんあると思うのです。

例えば、その箕輪工業さんにたくさん教室もあつたりしますので、担任の先生が、すべて自分の相談室を持つというようなことで、教室を 3 分割ぐらいしたスペースを使って、そんなものを用意したり。あるいは、単位制ですので、空いたコマが生じる可能性があるわけです。そのときに学習室なりいろいろな部屋が必要です。あるいは、憩いの部屋といいますが、みんなが語れる部屋というようなものが必要かもしれません。従って、そういうのも用意することによって、子どもたちの居場所といいますが、十分相談機能を備えた施設として、利用することができるといいますし、積極的な多部制・単位制の講座の設け方、つくり方によって、例えばある生徒たちは、物作りというようなことを試行するようなことも、あるかもしれません。

あるいは、進学校的なものを、選択的に取り入れることあるかもしれません。そういうことの、講座のつくりかたによって来る生徒たちの目的観念もうんと変わってくると思う

のです。そんなようなことで、1、1、1の募集で充足するにかとご心配いただきましたが、私が行きたいような学校、行きたいようなカリキュラム、行きたいような講座、学校運営のつくりかたをしていくということで、解決できることが多いのではないかと思います。

また、実施時期のことでご心配はさっきからいただいているわけですが、そのことが、すぐに箕輪工業の多部制・単位制実施について大きな変更を、余儀なくさせるようなことでないとすれば、それはこちらの実施計画という中で、それはさせていただくということになると思いますので、今はその大きな方向を確認していただくようなことで検討いただければありがたいと思います。

(池上委員長)

ありがとうございました。ほかにご意見ございますか。

(北原秀樹委員)

ちょうど、地元の中学校ということで、ちょうど2年の担当しておりますので、19年度というと、このちょうど生徒たちが高校に入る年になるわけですが、本当のことをいうと箕工がなくなるというのは、やはり中学校にとってはかなり大きな痛手で、中学校のどうしても勉強の苦手な生徒が、結構多く箕工へお世話になっておりますので、無くなると全日制へ行けなくなる生徒が、だいぶ出てくるのかなあということをちょっと心配はしております。

やはり、方向としてはこの多部制・単位制に移行ということで、委員として同意しましたので、この方向で進んでもらっていいと思うのですが、やはり町だとか、小、中学校の生徒への影響というものはやはりあるのかな、どういうふうに出てくるかというのは、ちょっと分かりませんが、いろいろ心配してもしかたがないので、決まったらそういう方向で、できるだけ県教委のほうに、いい高校に持っていってもらうということがいいと思います。

それと、もうひとつ定時制の関係ですが、先ほど出ましたけど上農高校の定時制というのも、施設もよくないということがありますので、ぜひいい施設をつくっていただいて、いい環境を整えていただいて、統合していったほうがいいのかなと、こんなことを思います。できるだけそういういい高校になれば、中学生もまた魅力を持って、感じて行けるのかなと思いますので、県教委のほうでぜひいい学校をつくっていただけるようお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

(北原曜委員)

全く同感で。要は一律の多部制・単位制ではなくて、特色をそれぞれにもたせて、以前に小林委員からの提案が出ていましたが、ああいうような形のものを盛り込んでいけば、要は先ほど県教委の方がおっしゃっているように、やりようによって成否が決まる可能性があるのですけれど、やりようによってこの問題点は、解決できるのではないかと思います。

私も上農の校舎等を再三見たことあるのですが、校舎が劣悪ですし、少人数、これまあい点もあるので、同じような悩みを抱える人たちが、箕工が変換した学校に

よってそこで教育を受けると、いうことになる、それはそこでまた素晴らしいことではないかなと思います。

（池上委員長）

ありがとうございました。その他の委員で特にご発言がございますか。よろしゅうございますか。

（藤本委員）

各委員さんの発言をみれば最終的には私は、いい学校になればやむを得ないと思っているのですが、19年度一斉スタートではなくて、もちろん私たちは教職員ですので、例えある学校が総合学科になるといって大反対しても、総合学科になれば一生懸命いい方向にもっていく。一生懸命、毎年検討して、いい学校にしたいと、みんな努力していくわけです。

けれど、19年度一斉スタートということになると入ってくる生徒の状況に応じて、我々も教育課程を変えたり、多く入ってきたら、定時制の生徒が居心地のいいように、できるだけ授業をセットしたり、そういう当然状況に応じて変えていくわけですので、19年度実施というのではなく、箕工を新しい多部制・単位制のいい学校にとっても、初年度からいい学校になるわけではないのですから。学校に入ってくる生徒、それから地域の状況を見ながら、夜間定時制の子どもたちに対応できる、そういういい学校にしながら、そういう状況に変えながら、職員が努力し、かつ設備を整えながら、最終的に学校が必要なものになるのであって、私は文章を見てドンピシャ19年度からとても県教委ができるとは思っていません。だから上農定時制募停を19年度実施でなくて、少なくとも過渡期的な状況として、その間にできるだけいい学校にしていく必要があるのではないかと。私は心配があるので、そこを確認したいということです。いい学校にしたいという、そういう時期は、やはり必要ですので、少なくともこれは譲れない範囲だと私は思う。

19年度一斉実施では、とても長野県で最初多部制・単位制に入ってくる生徒がどんな生徒か1年、2年では様子がわからないと思うのです。1年、2年たったらすごい人気で、わっと来るかわからない、定時制の子どもが入る余地がないかも。自然と2年、3年経過したら、安定してきて、定時制の子どもにも対応したいいい学校、いいクラスができるようになるかも。それが1年、2年の動きではわかりませんので。

（池上委員長）

はい。藤本委員の方からご専門の立場で、わかりやすくご説明いただきました。私の方からは、先程お配りを8区の皆さんには致しました資料等によりまして、まだ、今お話のように現在在籍している子どもがいて、先もご心配もあると思いますので、そういうお申し出もございますので、そういう時間をわれわれここにも設けていただいて、その件について万全を期していきたいと思っています。その過程、時期だとか、方法だとかについては議論があると思いますが、よりいい方向にするため議論について皆さんが、問題があるかと思いますがその点をひとつ、ご承知いただきたい。それではその件はそういうことでいきたいと思っています。よろしくお願いします。

それでは、9区の問題につきまして、先般、もうサマリーはいただいておりますが、岡庭

委員ちょうどおいでにならなかったと思いますので改めてお願いします。

（岡庭委員）

9区につきましては、ご報告致しましたように飯田長姫高校と飯田工業高校を統合して、1校削減するという方針であります。それで、問題は長野県教育委員会の職業教育についての方針そのものが、かなり前に出されていたと思うのですが、それが県民も知らないし、かなりのところが知らないという状況もあるわけで、当然、各学校の校長先生ともお話をしたんですけれども、職業教育そのものの、学科そのもの全体の在り方というのは、十分検討して見てもらう必要があるんじゃないかと、このままの状況でいいというわけにはいかないというお話もございました。

それから、施設、設備については全く手がつけられていない。飯田工業高校も、旋盤が古くてというお話もありまして、それを今、教師が一生懸命努力しながら、各種の大会に行けるような形で、教育しているということもあるわけでございます。

ですから、ひとつは職業教育全体をどうするのかという、長野県教育委員会がしっかりした方針をやっぱり出していただかないと、始まらないのではないかと思います。当面の問題とすれば、飯田工業高校が3学科4学級。それから飯田長姫高校が、やっぱり3学科8学級。8学級を現状で統合と。定時制も含めまして現状の統合というのが、私どもの案でございます。

基本的には今回の統合問題で、中学浪人を出さないということ、前提で進めていただくということでございます。ですから必然的にそれがどういう形になるのかと、いうことでありますけれども、最悪でもジョイント校化という形で、出発してもらいたいということでもあります。

あと先程申し上げましたように、学科再編の問題、もうひとつ下伊那農業高校の職業科も残るわけでございますが、下伊那農業高校は4学級になるわけです。そういうことから考えると、農業科もしっかりと第9区の中には、現在の学科そのものは位置づける形で学科の内容そのものについての検討を、早急に進めてもらいたいということでもあります。

それで、将来に渡って8学級全部維持ということのをわれわれは、要求しているわけではないわけございまして、生徒の動向と、それから当然学校を、もし最悪6学級になった場合に、今の飯長姫高校、飯田工業高校どちらも校舎を建てないと、多分それに対応できないということになるわけでありまして、それは県教委がしっかりお金をかけてやっていただきたいと。まさに、しっかりした実業高校の拠点になるような学校をつくってもらいたいと、というのがわれわれの1校削減に対する考え方です。

（池上委員長）

例の定時制の件は、よろしいでしょうか。

（岡庭委員）

定時制も統合という形でございます。

(池上委員長)

そうすると総合学科は、この間の文章のとおり、今後検討するという側面があるわけですね。

(岡庭委員)

総合学科は、そうですね。

(池上委員長)

こういうご報告でございますが、事務局の方で特にご発言ございますか。今までの中で事務局ございますか。今の岡庭委員のご発言の内容について、なにか特別ご発言ございますか。

(野村主幹教育支援主事)

中身につきましては、この推進委員会の中でご審議いただくことと思っておりますが、それを受けてまた報告していただけたと思います。

(池上委員長)

はい。わかりました。

(北原曜委員)

ちょっと気になっていることがあります。というのは、飯田工業と長姫が統合されるということになれば、商業科と工業科が一緒になるわけですが、現状維持ということで統合ということになると、非常に巨大化してしまうわけですね。それで、校舎も新築ということも言及されていましたが、やはりちょっと、財政のことを考えると疑問を感じてしまうわけです。

そもそも、工業科と商業科を一緒にした方がいいのか、それとも、下農が今4学科ありますけれども、むしろ商業は、農業科の方についた方がいいんじゃないかなという気がしています。工と商というよりは、農業と商業の方が、非常に関係が深いと、結構そういう学校も多いと思うのですが、そういうことで、商業科の方を、下農の方に持っていくというのは考えられないでしょうか。

それは、農業過程はこれから厳しいと思うのです。それで今、4学級を維持しているわけですが、今後3とかになった場合、下農が非常にじり貧になった形になってくるんじゃないかと、この辺非常に危惧(きぐ)しているのですけども、どうでしょうか。

(池上委員長)

それではお願いします。

（岡庭委員）

当然、その辺の議論もしてあるのですけれども、当面、8 学級でジョイント化スタートして、その過程の中で、先ほども言いましたように、全体のより良い学科を、どういうふうに再編したらいいのかと、いう形の十分地域を交えての議論をした暁に、第二次再編といいですか、当然私は地域高校の問題も含めて、第二次再編はやらざるを得ないだろうと思っているわけですし、今のままで、だいたい今回のやっぱり高校改革の要求については、県民の要求とかなり離れているわけですね。県民はもっと、やっぱり高等学校教育中身をどう変えていくのかとか、どうするのかっていうことだと思います。

それは職業教育ではどういう職業教育をやったらいいのか、企業はどういう職業教育を工業高校に求めるのか、そこら辺の議論を本当はやった上で、削減案が出されてくるはずじゃないということを、私はずっといっているんですけど、その事をやらないで、今度出て来て、今度は、いってみれば頭の上をちょっと八エを追った程度だと、第二次再編案では、必ずこれはやっていただかなくちゃならんと私は思っております。

その時に、十分な議論をしていただく拙速な形で、商業だから下農に付けたらどうかという議論は、今のところ非常にしにくいというのが実態でございます。

学校をどうするのかという議論に、終始した形で今回の第9通学区の意見が出ましたので、北原先生のおっしゃることも、十分やっぱりわれわれのところで、議論になったわけでございますが、今回はそういう形で、学校中心に考えたということでございます。

（池上委員長）

例えば定時制を下農に入れるとか、そういう、発想もあったわけですか。要するに学校の考え方として、どうなのですかね。

（岡庭委員）

それより農業教育をどうするかという、県教委に対しまして、大変不安があるほうが多いわけですね。そこを、非常に議論をしにくくしてきていると、いうことでございまして、今回は、さまざまな問題に触れないと、1 校削減というこの委員会からいただきましたこの命題に素直に答えるということだけに力を入れましたので、委員長のお答えになりませんけどよろしく願います。

（池上委員長）

わかりました。それでは、今そういうことでございますので魅力論、魅力づくりがそのところに、精いっぱい思いを入れていただいて、対応をお願いしたいな、今回はそういうふうに考えております。

（米澤教育次長）

今岡庭委員さん、ちょっと確認をさせてもらいたいのですが、将来的に8 学級を入りきらないのを置いておくのはイメージをお持ちで、確かに2 クラスもという学科もあるわけです。それと、商業のことも含めたり、それから下伊那農業の農業も含めたり、全体的なことを今、委員さんは学校再編のときにお考えでしょうか。

全体ということでよろしいですね。

（岡庭委員）

全体です。

（米澤教育次長）

そうですか。わかりました。それから、先程新しい学校をつくってもらってということでしたが、それは新校舎という意味でしょうか。

（岡庭委員）

校舎一校が減るということで、飯田工業にもし、統合した場合には、校舎1棟建てないと、6学級を収容しきれないということだろうと、ただそのことは私が考えたことではないので。

（米澤教育次長）

そうはいつでも基本的に委員さん、最初出発が既存の建物を使うという考えが基本ですので、1棟建てるといふようなところまで、今踏み込んでお話になったということになると、ちょっと私どもは、わかりましたということにはできかねますが。

（岡庭委員）

いや、だから分かってもらえなくたっていいですよ。結局、地域の要求にちゃんと答えて学校さえつくっていただければわれわれはいいので、そもそもこれだけ高校再編をやるに際して、設備投資をイニシャルなにもかけないでやろうと思うことの方が、私はずっとおかしいと思っているのです。

だから、総合学科をつくる、多部制・単位制高校にするって、それはそれなりにやっぱり、群馬県のようにちゃんとお金をつくってから、皆さんで検討しようというのならわかりますけど、それはここで議論すべきことじゃないので、私は。

（池上委員長）

ほかの委員さん、ありますか。

（関 委員）

将来構想、学校の主体に考えたということですが、そのことはそれでよいと思います。しかし、そうはいつでも現実的に統合していく過程で、それぞれ長姫からあるいは飯田工業から、職員が行き来しながら授業をしていかなければならない段階もあると思います。そういう場合長姫と飯田工業の距離が私は非常に気になるところであります。

将来的に、長姫の建築と土木を、飯田工業に統合して、この飯田工業を工業の拠点校とするということはいいと思うのですが、北原委員さんのおっしゃられるように、商業は下農の方が受け入れるという考えが、私は統合していく過程で、現実的には自然かなと思います。

8 クラスになるということは、ちょっとキャパシティの問題で、非常に無理があると思います。

（池上委員長）

他にございますか。それでは、そういうご報告の方向で、委員長としてもかなりやっかいで実施段階で、いろいろ考えないといけない問題が、先程の関委員からのご発言もございますが、そこは県の段階でしっかり考えろ、こういうことだと思いますので、それは考えさせていただくという結論で閉めたいと思います。

他にないとするば、この案件はこれで終了したいと思いますがいかがでしょうか。よろしゅうございますか。それでは、そんなことでよろしくお願い致したいと思います。

ちょっとお話を戻していただいて、先程の魅力づくりのところで、ご意見を伺っておいでシートをつくっていきたいと思います。

（藤本委員）

いろいろな課題がだいたい固まってきたのですが、実施計画というのを県教委に丸投げすることが、私は、心配なのですけれど。ここでまとめができて、県教委へ出し、県教委が教育行政の責任において、計画を立てて、19年度の末になるか、部分的には多分2年、3年後になるか、こういったばらばらの状況になるが、実施計画の段階でも、やはりそこに再度、相談機関を設置し、そこで策定段階でも、現場なり地域なりの声を聞きながら、検討していくというのが当然あるのでしょうね。

（池上委員長）

事務局のご意見をお願いします。

（柳澤教育主幹）

新たにまた意見を聞くための委員会を立ち上げるということは考えていません。従って、当初スケジュールをお示しましたように、1月の初、中旬までに報告をいただけます、それを基にして実施計画を策定してまいりたい。こういうことでございまして、こちら推進委員会については前前回だったでしょうか、1月いっぱいをかけてということで、進めていただいております。そういうふうに理解しているということでございます。

（藤本委員）

私は、機関を設けなくても、少なくとも地域とか、関係する団体から意見を聞きながらの実施計画が当然と思っている。実施計画が出来た段階でポンと出すのではなくて、実施計画の段階で意見を聞くべきである。

（池上委員長）

かなり重要な点で細かいはずですけど、いかがでしょうか。



(柳澤教育主幹)

各推進委員会では、さまざまな地域の声をお聞きしながらご審議をいただいております。それを踏まえた報告書になりますので、いただいた報告書を考慮して県教育委員会が実施計画をたてるということになるかと思います。

昨年未から1月にかけて、県として、県民の皆様からのご意見をということで募集しておりますし、そういった意見というのは、限られた期間ではなくて常日頃から、いろんな形で入ってきていますが、今回は期限を切りまして、ご意見も募集してたくさん集まったということでございますから、そういったものも参考にさせていただくということとはございます。

(池上委員長)

わかりました。今の件について、この会を運営している過程よりも、「あの時意見を求めてあの時決めたじゃないか」という話が、これは世の常でございまして、なかなか徹底できないという側面があって、文章で通達したとかということだけだと、なかなか難しいことがあるんじゃないかなと、いうふうにしみじみと感じましたもので、その点を申し上げておきたいということがひとつ。

それから、われわれ少し、委員の立場で申し上げますと、今、藤本委員からの発言にあった内容に抵触しますけど、いつも県教委と取り巻く社会の間で、議論の交流のテーブルがあるほうが、いいじゃないかなということがあったか私も知りませんが、それが何だということになりますと、われわれも知らない、私も知らないで、できるだけそういうテーブルを設けていただいて対話をしていただくと、いうふうにさせていただきたいと考えながら実はいるところであります。

例えば、私どもの職業に考えますと、いったい日本の技術教育をどうするのかと、先程、北原委員の方からも、職業案の問題ありましたけど、例えばそういうことの側面について、それでもかなりインターバルを短くしてそういう議論があって、初めて日本がよくなると私も考えておりますので、ぜひそういうものをお願いしたらありがたいなと考えておりますので、よろしくお願いしたいと思います。

よろしゅうございますか。その点では。

(藤本委員)

出来たら本当はそういう機関をつくっていただきたいというのが本音ですけども。ぜひ実施計画の段階でも、地域なり、関係者からぜひ声を聞いていただくように。きちんとした機関を、私はつくってもらいたいと当然思うんですけど、できないというのでしたら。

(池上委員長)

この件については、そういう申し入れを文章でも、させていただこうというふうに考えています。

魅力づくりのところでございますが、おおむねこういうふうなコンセプトを考えていますので。これは事務局でも調整して、最も意見の徴収がやりやすい様な体制にはしたいと思いますが、区分や手順というのをもう1回申し上げます。

まず区分でございますが、これは聞き流していただいてあと紙に入っておりますから。共通事項がひとつございます。出ました総合学科問題でございます。それから多部制・単位制の問題がございます。それから定時制の問題がございます。各高校ごとの問題がございます。地域高の問題がございます。普通高の問題がございます。普通科ですね。それから職業科の問題がございます。議論をしておりました統合等の問題があります。おおむねこういうふうなくくりで、意見を拝聴するという方法でいきたいと思っておりますが、なお修正をかけて事務局とベストの方法でいきたいと思います。

方法としては先ほど申し上げたように、お出しをいただいたあと、私の手元でできたら副委員長と共に、まとめをさせていただいて、次回にはお手元にもそのまとめが、お届けできるという形でやらせていただいて、そこで修正をかけていただいて、それから最終報告に最後に持ち込んでいきたいと考えていますので、なにぶんのご協力をお願いしたいということで、再度お願いを申し上げたいと思います。

ほかにご意見ございますか。よろしゅうございますか。それでは次回だとかいうことについて、日程についてのご提案を、事務局からお願いをしたいと思います。

（野村主幹教育支援主事）

はい。次回の日程につきましては、1月18日（水曜日）でございますが、その午後をというふうに考えておりますが、よろしく願いいたします。

（池上委員長）

午後でしたね。

その次はいかがですか。

（野村主幹教育支援主事）

その次は、1月30日午前あたりで考えておりますが、まだ十分つめてありませんが。

（池上委員長）

場所は、ここでもよかったですね。

（野村主幹教育支援主事）

はい。

（池上委員長）

はい。ほかになにかご意見ございますか。ではよろしゅうございますね。ちょっと時間が早うございますが、これで今回を終了いたします。ありがとうございました。